



激戦区で旋風誓う都立校と府立校 21世紀枠推薦校から 自力で60年ぶりの夏へ

取材・文=服部健太郎
写真=前島 進

八尾

[大阪]

TEAM REPORT 2
公立校の
威信と
誇り

「練習時間では絶対に勝てないわけ。そこはもう、割り切っています」
攻守の要としてチームをけん引する、正捕手の西浦謙太主将は生き生きとした笑顔を浮かべながらそう言った。
学校に隣接するグラウンドは他部との共用で放課後に使用できるのは月、水、金曜日の3日あり、完全下校19時が徹底されており、平日の練習時間は最大で2時間半。取材日も5つの運動部が同時にグラウンドを使用しており、内野部分のみを使用する形で野球部の練習は始まった。「量で勝負できない分、質に活路を見出すしかない。しっかりと集中し、工夫する。それがチームの合言葉です」

内野部分では外野フェンスに見立てた防球ネットが並べられ、外野の間を割った打球の処理を想定した練習が行われていた。「先日の練習試合でフェンス際からの中継プレーが乱れたんです。その問題を解消するためにこういう練習を今日しよう」と決めた。

大阪推薦校に選出から 選考委員会までの2カ月

八尾は府内複数の進学校。部員のはほぼ全員が練習後、塾に直行する。「平日は練習より塾にいる時間のほうが長いと思います」と話すのは長田貴史監督。現役時代は筑波大で主将を務め、大学卒業後、一般企業を経て、指



長田監督は就任7年目。筑波大時代は主将を務めた実績がある



昨秋の大阪大会で5回戦、今春も5回戦と上位進出を挙げている。過去には10回の全国大会出場実績があり、今年センバツ21世紀枠の近畿地区推薦校にも選出された

■八尾甲子園戦績

大会	回数	成績	
春6回出場(9勝6敗)			
夏4回出場(7勝4敗)			
年度	大会	回数	成績
1926	春	3	1回戦
1929	春	6	4強
1930	春	7	1回戦
1931	春	7	4強
1931	夏	8	1回戦
1932	春	9	8強
1932	夏	18	8強
1952	春	24	4強
1952	夏	34	3強
1952	夏	34	進部勝
1959	夏	41	4強

※1932夏までは八尾中

導者の道へ。柏原東の監督を7年務めた後、2013年春より現職。就任7年目を迎えた。

「勉強と野球の二刀流生活を部員全員がしっかりとやってくれている。そんな生活の中で育まれた集中力は彼らの大きな強みだと思っています」

創部は1915(大正4)年。春6回、夏4回の甲子園出場実績を誇る伝統野球部に1度目の甲子園出場のチャンスが訪れたのは今春のセンバツ大会。昨年12月に発表された「21世紀枠」の各地区候補校9校に選出。大

阪から近畿地区推薦校に選ばれたケースは初だった。

21世紀枠3校が発表された1月25日、八尾のもとに吉報は届かず、67年ぶりのセンバツ出場はならなかった。しかし、候補校に選出されたことで甲子園を強烈に意識しながら過ごした日々はチームの成長を大いに促進した。「候補校の中では秋の成績は下位でしたが(仮に出場できては)甲子園でコテンパンにやられてしまふ」という危機感がチーム全体にありました。でもその危機感がかつてないほど

どの集中力、苦しい練習と向き合う原動力になってくれたのは間違いない(長田監督)。

西浦主将も「11月に大阪の推薦校に選出されてから最終発表に至るまでの約2カ月間はチームに大きなプラスをもたらした貴重な時間」と言い切った。

「出場できなかったことは残念でしたが、甲子園で勝つことを強く意識



主将 西浦は鋭いスイングで進撃学の投手にも力負けしない

し続けた冬場は今夏の戦いに向けての大きな力になってくれると確信しています」

トになったとしても絶対に責めたいことがチームの約束事。『ナイスストライク』、『ナイスチャレンジ』といった声を掛け、すぐに切り替えていく。「けん制アウトも先の塁でアウトになるのも同じアウト」と割り切っている。けん制死は少なくない。でも、ウチの打力の弱さを考えた場合、この割り切りがなければ大阪ベスト16に入るのには難しかったと思います(長田監督)。取材中、グラウンドでは「ナイスストライク!」と一

長打を打てる選手が少なく、能力的には例年と比べると落ちるが、粘り強さがある。逆転勝利も多い」と現チームを評した長田監督。ゲームにおけるチームの合言葉は「守備時はイニングに複数点を与えない。攻撃時はイニングに複数点を奪いに行く」。

投手陣をけん引する右の藤澤丈、左の永井希翼はともに技巧派の横手投げ。継投策を実施し、粘り強く守りながら、好機をものにし、競り勝つスタイルが身上である。

長打不足をカバーすべく、攻撃面では機動力を前面に押し出し、秋、春の公式戦10試合で34盗塁を記録。ベンチからのサインではなく、選手個人の判断の下でスチールを敢行するのが八尾流だ。

「足の遅い、速いに関係なく、常時スタートOKのグリーンライト」がチームの基本です。いけると感じたならば、どんどん走っていく。その結果、アウ

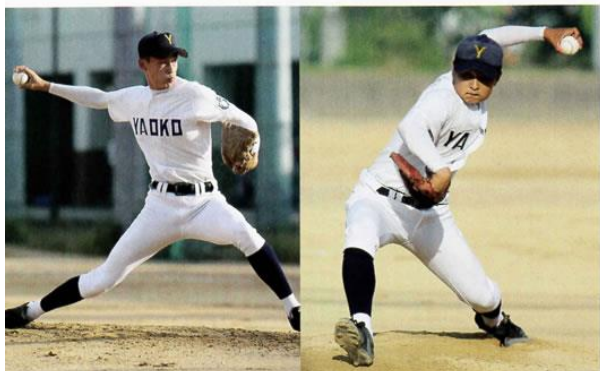
次!」と一たび前向きな掛け声が終始飛び交っていた。失敗を恐れず、思い切りのいいプレーがで

きる環境が整備されている。来たる夏の戦いに向け、西浦主将は次のように意気込みを語った。

「21世紀枠の候補に選出さ

れ、注目されたことで他校のマークが多少なりともきつくなるかもしれないが、自分たちの野球をやり切ることに集中し、秋、春を超える結果を絶対に残したい。大阪で8回勝ち、自分たちの力で甲子園に行きたいです」。

八尾が最後に甲子園出場を果たしたのは1959(昭和34)年夏。60年ぶりの聖地行き切符をうかがう公立進学校の戦いに要注目だ。



投手陣は左腕・永井と右腕・藤澤を中心に最少失点でしのいでいきたいところである

「大阪で8回勝ち、自分たちの力で甲子園に行きたい」(西浦謙太主将)